

■ 解答・解説

問1 拝ま（マ行四段動詞「拝む」未然形）／ざり（打消の助動詞「ず」連用形）／けれ（過去の助動詞「けり」已然形）／ば（接続助詞）。

「ざり」は打消。全体で「拝まなかったので」。已然形＋「ば」で順接の確定条件（～ので）になります。

問2 「もの足りなく（残念に）思っで。」

「心うし」は「気に入くない・情けない・もの足りない」の意味で、ここは石清水へお参りできていないことを残念に思う気持ちを表します。

問3 「徒歩で（歩いて）参詣した。」

「より」は手段・方法を表す格助詞で「～で」の意味です。「徒歩より詣でけり」で「歩いて参拝した」となります。（「より」には起点・経由・比較などの用法もあるので、文脈で見分けましょう。）

問4 過去（～た）。「けり」は過去・詠嘆の助動詞ですが、ここは出来事を語る地の文なので「過去（～た）」でとります。「詣でけり」＝参詣した、「帰りにけり」＝帰ってしまった。

問5 法師は、麓にある極楽寺や高良（こうら）神社などだけを拝んで、「石清水（八幡宮）への参拝はこれだけのものだ」と思い込んだ、ということ。本当の本殿は山の上にあるのに、それを知らなかったのです。

問6 基本形＝「ぬ」（完了の助動詞）／活用形＝連用形。

「帰り（連用形）＋に（完了「ぬ」連用形）＋けり（過去）」で、「帰ってしまった」という意味になります。連用形の「に」は完了の「ぬ」と見分けましょう。

問7 「かたへの人」＝そばにいる人・仲間（連れの人）。ここでは、法師が帰ってから話しかけた身近な相手のことです。

問8 「長年（ずっと）思っていたことを、果たしました。」

「年ごろ」＝長年・ここ数年。「はべり」は丁寧の補助動詞で「～ます・～ございます」。「ぬ」は完了の助動詞「～てしまった・～た」です。

問9 「年ごろ」＝長年・数年来・ここ数年（ずっと）。「年ごろ思ひつること」＝「長年思い続けてきたこと」。日数の「ごろ（頃）」ではない点に注意します。

問10 丁寧の敬語（補助動詞「はべり」＝「～ます・～ございます」）。聞き手であるかたへの人（話し相手）に対する敬意です。法師がそばの人に丁寧に話している場面なので、丁寧語になります。

問11 尊敬の敬語。基本形は「おはす」（「あり・をり」の尊敬語で「いらっしゃる」）。ここでは「尊くおはしけれ」で「尊くいらっしゃった」と、石清水の神（八幡神）を敬っています。

問12 (1) 係り結び（の法則）。係助詞「こそ」があるため、文末が已然形で結ばれています（こそー已然形）。

(2) 「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形。

問13 (1) 係り結び (の法則)。係助詞「か」を受けて、文末が連体形「けん (けむ)」で結ばれています (か―連体形)。ここは疑問の気持ちを表します。

(2) 「けん (けむ)」は過去の推量 (過去の原因推量) の助動詞で、「～たのだろう (何があったのだろう)」の意味です。

問14 「ゆかし」=知りたい・見たい・心がひかれる。ここは「(みんなが山へ登る理由を) 知りたかった」の意。

問15 読み=ほい。意味=本来の目的・かねてからの願い (本心)。「神へ参るこそ本意なれ」=「神へ参拝することこそが本来の目的だ」。

問16 仁和寺にある法師 (石清水へお参りに行った、あの法師)。この場面はずっと法師の行動を述べているので、「山までは見ず」の主語も法師です。

問17 きまりの名前=係り結び (の法則) (係助詞「ぞ」―連体形)。「ける」の活用形=連体形。係助詞「ぞ」を強調で受けて、文末の「けり」が連体形「ける」になっています (ぞ―連体形)。

問18 どんな小さなことでも、先導してくれる経験者・案内人がいるほうがよい、という教訓。思い込みや早合点 (はやがてん) で大事なところを見落とし、失敗ないように、ということを伝えています。

問19 「ちょっとしたことにも、案内者 (先導してくれる人) はあってほしいものである。」
「先達」=案内人・指導者。「あらまほし」=あってほしい・望ましい。「なり」は断定の助動詞です。

問20 あら (う行変格動詞「あり」未然形) / まほしき (希望の助動詞「まほし」連体形)。
「まほし」は「～したい・～てほしい」という希望を表す助動詞で、「あらまほし」=「あってほしい・あってほしい状態だ=望ましい」となります。

問21 法師は「神へ参拝することこそが本来の目的だ (神へ参るこそ本意なれ)」と思い込み、山の上に本殿があるとは知らず、山までは見なかったから。(みんなが山に登っているのを不思議に思いながらも、確かめずに帰ってしまった。)

問22 作者=兼好法師 (吉田兼好) / 時代=鎌倉時代の末期 (14世紀前半) / ジャンル=随筆。
